

コーウェン地球生命史 第6版

マイケル・ベントン 編
ロバート・ジェンキンス, 久保 泰 監訳

“History of Life”は、1990年に初版がRichard Cowen博士によって上梓されて以来、2013年に第5版が発行されるまですべてCowen博士が独力で改訂作業を行ってきた教科書である。『コーウェン地球生命史』は、Cowen博士が改訂を重ねてきた内容に加えて、英国ブリストル大学の古生物学研究チームが改訂を担当して客観性と最新情報を補完することで2020年に完成した「最新かつ最強版」の“History of Life”を、気鋭の古生物学者であるロバート・ジェンキンスと久保 泰が監訳した日本語版地球生命史の教科書である。

最初に結論を言っておきますね。「地球生命史を学ぶならこの1冊で必要十分。まじコスパ最高！」評者の専門を知る人ならば思わず「古生物学者でもないシロートが何を偉そうに言うてやがる？」とツッコミを入れたくなると思うのでついでに返しておきますね。「おめーら古生物かぶれの常識はオレには通用しねえ!! シロートだからよ!!」

評者は、本書の第6章まで（生命の起源からカンブリア爆発まで、そして地球表層環境変動と生命進化の関係性につい

て解説した章まで）は一言一句漏らさず読んだ。そして「広く新しい概念や成果を簡潔・客観的に体系化した編集すごい」と感心しきりであった。さすがにそれ以降の古生物の分類とか復元図が目白押しになる章あたりからはかなり読み飛ばしてしまったことも事実だ。半年や1年かけてじっくり学んでいくとしてもいわゆる「情報多すぎ!」の内容に圧倒されるので、シロートでなくても本書の全体をほんやりつかむだけでもかなり難易度は高い。しかし、優れた教科書というのはそういうものだ。内容はハードだが、時空間別に順序立てて章構成されているので、一度にすべてを理解できずとも自身の興味や必要に応じてじっくり読み返して、知識や理解の深化や体系化を図ることができるはず。そして、読者が何度も何度もページを開いて読んでいくたびに新たな発見や思わぬ知識の結びつきに出会い、「地球生命史」という人類において最も知的好奇心を揺さぶられる命題に対する体系的理解を更新したり、解決すべき研究対象を思い描いたりすることに大きな助けとなることが想像できる。

「監訳者まえがき」で述べられているように、これまで古生物学の日本語による体系的な教科書はほとんどなかったらしい。たしかに「古生物かぶれのマニャック解説書」は見かけることはあったが、地球科学としての地球史、現生物の代謝・生化学あるいはゲノム進化、化学的指標による古環境復元、発展著しい人類学、を網羅した古生物シロートの評者から見ても「思わず読みたい」と思え

るような教科書はなかったかもしれない。そういう意味では、古生物学に興味をもつ層だけでなく、理系・文系を問わず広く地球と生命の共進化の本質的な理解を目指す生徒にとって、入口から最先端までを学べる最高峰の教科書といえる。

再び「この評者、やたら本書を褒めちぎるけど編者とか監訳者とか出版社に何かもらってんのか?」と言われそうである。しかし褒める理由は至ってシンプル。自国語で書かれた優れた教科書はその学術研究分野の発展においてめちゃくちゃ大事だからだ。

理由その1. 優れた教科書がない学術分野は廃れる。優れた教科書は専門家の育成だけでなく遠く離れた分野の才能を呼び込む最高の入口である。新たな才能の参入や刺激がない学術分野は単なる「同人の集まり」となって代を重ねるごとに貧弱になる。

理由その2. 学術研究には大義名分（研究をするための意義・価値の可視化と共有）が必要。社会的要請が大きな（選択と集中に選ばれる）課題や領域は研究がやりやすいし、金とポストが人と才能を集める効果がある。しかし社会的要請と「知的好奇心に基づく興味」は必ずしも整合しないし、社会的要請と純粋な学術的価値も相関するものではない。「地球生命史」なんて、人々の知的好奇心人気ランキングの上位を占めそうな対象であるが、あまり「選択と集中」の対象には選ばれそうにない。そんな社会的要請は強くないが学術的価値は大きそうな研究のわかりやすい大義名分は、「教科書を書き換える」ことに尽きる。そして優れた教科書であればあるほどその意義・価値は大きくなるのだ。

さあ『コーウェン地球生命史』を読んでみてください。書き換えることがメガ盛りで、古生物かぶれもシロートも後先考えずに研究したくなること請け合いです。

海洋研究開発機構超先鋭研究開発部門部門長
高井 研



B5変型判
304ページ
定価：5390円
東京化学同人